百々裏話（23）

おもてあきら

【風姿花伝と花伝書】

世阿弥の能楽論書の中でも特に名高いのが「風姿花伝」であるが、この本は、世間一般にはむしろ「花伝書」の名で知られている。正しい書名はもちろん「風姿花伝」であり、「花伝書」は後世に生まれた俗称である。世阿弥自身は略称して「花伝」とは言っているが、決して「花伝書」とは言っていない。

然るに、正しい書名の「風姿花伝」があまり用いられず、「花伝書」と通称されるようになってしまったことの最大の責任者はなんといっても吉田東伍博士であろう。博士校註の『世阿弥十六部集』が世阿弥を世間に紹介し、その遺書を公刊した最初の本であったが、その際に、底本には「風姿花伝」と題されていたにもかかわらず、あえて書名を「花伝書」と改めて翻刻してしまったことが、正しい書名が流布せずに俗称が通用するようになった第一歩である。その後に刊行された、野々村戒三氏の『校注世阿弥十六部集』や、野上豊一郎博士校訂の岩波文庫本「花伝書」、能勢朝次博士の『世阿弥十六部評釈』等は、いずれも吉田本を底本として採用した関係から、「花伝書」の名を踏襲し、その名は一そう世間に広まってしまった。金春本を発見・覆刻された川瀬一馬博士が『世阿弥自筆伝書集』や『世阿弥二十三部集』では「風姿花伝」の名を採用していながら、『頭 花伝書』や『現代語訳花伝書』などの一般向けの本では俗称に後退してしまうほどに、その勢力は強かったのである。しかし、西尾実博士校注の岩波文庫改訂版が「風姿花伝」を採用して以来、徐々に正しい書名が勢力を盛り返しつつあるのが現状と言ってよいであろう。

正式の書名ではないにしても、せっかく流布した名前なのであるから、「花伝書」でもかまわないではないか、という考え方もあるかのようであるが、私はその説には賛成できない。なぜなら、長い期間、「花伝書」とか「花伝抄」とかいう名が、世阿弥著作の固有名詞としてではなく、別の意味に用いられていたからである。

観世宗家に『花伝書抜書五十品之事』と題する伝書がある。末尾に観世大夫宗節の署名があるから、天正五年（一五七三）から天正十一年の間に書かれた伝書に相違ない。この本は「花伝書抜書」と題していながら、個々の曲の謡い方などを五十ケ条集めただけで、世阿弥の「風姿花伝」とは全く関係がない。従ってその書名に用いられている「花伝書」は世阿弥の伝書の固有名詞ではなくて、能の秘伝書の意であったろうと思われる。また、慶長、元和の頃に刊行された古活字版八冊の能の伝書（いわゆる八帖花伝書）は、観世音阿弥・金春善竹・宝生遍阿弥・金剛宗せつの四人の編纂であると言いながら、「花伝書」を書名としており、「花伝書」が世阿弥の伝書の固有名詞として意識されていなかったことを示している。むしろこの場合は、八冊の本の書名として、能の秘伝書の意に用いられていた「花伝書」の名を借用したものと考えられる。一六〇三年（慶長八年）に刊行された『日葡辞書』にクッデンショの項目があって、〃華道の伝書〃の意に並べて、〃歌舞の演じ方を論じた書〃の意の訳を加えているが、後者は決して世阿弥の「風姿花伝」のことではなく、能の伝書一般を意味しているか八帖花伝書のことを言っているかのどちらかである。慶安五年（一六五二）刊の松永貞徳の『戯草』（つれづれ草大意）に、

…又、猿楽の秘書とて花伝抄と言ものを或人天満の下間少進法印に見せければ、

「これは偽書なり。金春禅鳳が奥書有て中に遊行柳の能の事をかけり。此うたひは観世弥二良とてちかき世の者のつくりたるのふなり」といはれし。（八十八段）

とあるが、この話の場合は金春禅鳳の伝書を「花伝抄」と称しているのであり、世阿弥の伝書の意でないことは確実である。万治二年の喜多十太夫の勧進能を非難した『舞正語磨』に対する返答書として刊行された『猿樂』に、

…されば懐中抄にも、此所の仕舞をばなる程目だつやうにするがよしとこそは侍れ。奥義抄第八には、禅法の入室説禅のおもかげを写すとしるせり。又、十体抄には、此所は艶のしまひの有所としるしたり。右の花伝書どもをよくよく考ふるに、げうげうしく目だつやうにするがよろしくこそは侍れ。

とある場合の「花伝書」は、懐中抄や奥義抄や十体抄などの（恐らくは架空の）書を言っており、能の伝書の意に用いているものに相違ない。そうした意味に「花伝書」や「花伝抄」の名を用いている例は、『四座役者目録』や『わらんべ草』にも多く見られ、それが江戸時代の普通の用法であったものと考えられる。『実鑑抄』『髄脳記』『風姿抄』『十体抄』などを、上に花伝の二字を冠して『花伝実鑑抄』『花伝髄脳記』『花伝風姿抄』『花伝十体抄』とも言うのは、「花伝」の二字に能の伝書の意があることの応用であり、能の伝書であることを明確に示す効果があったからであろう。「花伝風姿抄」という名があることからみても、世阿弥の「風姿花伝」の略称を借りたものではよもやあるまい。

右のように、「花伝書」や「花伝抄」が広く能の伝書の意に用いられたのも、もともとは「風姿花伝」が「花伝」と略称されたことに由来するのであろう。秘伝書であったために、作者や内容のことは世間に知られず、ただ〃能には花伝という秘伝書がある〃という程度のことだけが知られ、いつしか、〃能の伝書は花伝書である〃というように誤用されてしまったのであろう。

いずれにせよ、「花伝書」は長い間、能の伝書の意に用いられていたのであって、固有名詞としては、むしろ八帖花伝書を意味することはあったが、世阿弥の「風姿花伝」を意味することは、ほとんどなかったのである。それが、吉田博士の誤用以来、世阿弥の名が高まるにつれて「花伝書」の名も高まり、正しい書名を忘れさせ、江戸時代に能の伝書一般を意味する語であったことも忘れさせてしまう程に、世間に広まってしまったのである。だが、誤まりはやはり誤まりであり、学者や学生は、正しく「風姿花伝」と呼ぶべきであろう。

なお、吉田博士が「花伝書」の名を採用したのは、多分、八帖花伝書の影響を受けたためであろう。八帖本には古活字本と整版本とがあり、寛文五年の刊記を有する整版本は、各巻の末尾に、古活字本にはない世阿弥の名を加え、世阿弥の著作であるかのように装っていた。それが世阿弥の著でないことは勿論吉田博士も見破っており、〃八帖本花伝書はにせ物である〃という強い主張を持っていたために、本物に接して、〃これこそが真の花伝書だ〃と考え、書名を「花伝書」としてしまったのではなかろうか。

なおまた、八帖花伝書は、それなりに甚だ面白い本である。学生諸君に一読をすすめたい。活字になったものとしては、明治の槐屋刊行の和装本（明治31年の初版本は古活字本を底本とし、35年以後の改訂版は整版本が底本であり、少々内容が異なる）と、丸岡桂氏校訂の謡曲叢書本（梅若家蔵の写本が底本）とがあり、割に手に入れ易い本である。

（38・6・6）